

屋島の夕日

四国経済連合会参与（四国経済産業局長）

徳増 有治



瀬戸内海が国立公園の一つであることは誰もが知っていますが、日本の誇る自然、景観を守り活用していくという法律そのものが、屋島、小豆島を中心とした備讃瀬戸の美しさを一つの題材として検討され、昭和9年、日本最初の国立公園として瀬戸内海（当初は備讃地域）が指定されたことをご存知でしょうか？

赴任して1年、四国内を巡るほどに素晴らしい景観に出会い、自分の記憶に留めるだけではあまりにもったいなく、写真として記録にも残そうとカメラの購入を決意した。

山、溪谷、川、島々、季節、歴史、文化、産業遺産、いずれも素晴らしく、多くの人に伝えたいが、その中でも、時間とともに刻々と移ろい、一瞬たりとも同じ表情を見せない瀬戸内の景観は、にわかカメラマンの撮影意欲を掻き立てるには十分である。

もちろん亀老山展望台から望むしまなみ海道、瀬戸内の景観も素晴らしいが、一度には書ききれないので、ここでは来年に瀬戸内国際芸術祭も予定されている備讃地域の魅力に触れてみたい。

香川の西、庄内半島の先端で、浦島太郎伝説が息づく粟島を眼下に据える紫雲出山（しうでやま）。頂からこぼれんばかりに咲き乱れる桜の頭越しに見る瀬戸内の島々は、まさに絶景である。

五色台の先端にある大崎山の展望台からは、手の届きそうな小槌島、瀬戸大橋と瀬戸内海の島々との共演が圧巻だ。流先生の彫刻「またきまい」の、島々をまたいで渡るという創作的意図そのままに、彫刻の間から瀬戸内に沈む夕日の素晴らしさは、瞬きさえもためらってしまう。

我が国の歴史上の位置付けもさることながら、市街地からわずか20分足らずで都市と自然が一望できる屋島からの瀬戸内の眺望は「素晴らしい」の一言に尽きる。穏やかな瀬戸内の海面は

夕日を写す鏡面となり、干満による潮流や穏やかな風、絶えることのない船の往来、航跡が美しい海面に微妙な変化を与え、一瞬として同じ光景を留めない。

先日、友人の誘いで北嶺を訪れ、遊鶴亭からの320度の大型パノラマに言葉を失った。由緒ある屋島寺や、風情あるお土産屋、お茶屋さん、小さいけれど世界の先駆けとなっている水族館やセンスの良いミュージアムショップ、南側だけでも十分楽しかったが、また、大きな魅力が加わった。

最盛期には年間200万人以上が訪れていたそうだが、その後、ケーブルカーも廃止され現在に至っている。内外の社会情勢が大きく変化し、観光や時間に対する価値観も大きく変わってきているとしても、瀬戸内の美しさは変わらうはずもなく、廃屋が目立つ今の状況は少し寂しい。

来年には瀬戸内国際芸術祭も予定され、会場となる島々を一望できる絶好の場所でもある。地域の時代が叫ばれる今日、かつて、法律制定のきっかけを提供したことを考えれば、関係者が一致協力して、さらには地域が愛し誇れる場所として住民も一緒に、国立公園の新たな展開を地域から提案できないものであろうか？

